

2020年6月14日 聖餐式説教

教会の期節は、聖霊降臨節へと入ってきました。本年は3か月にわたる礼拝休止期間があり、私たちは先週の礼拝を復活日礼拝として守ったところですが、その間に、大斎節・聖週・復活節・昇天日・聖霊降臨日・三位一体主日が続きました。教会の暦の中で上記の期間は特に重要な時ではありますが、本年はそれを飛ばして聖霊降臨節に入っていくことになります。しかしながらそれは不十分なまま私たちが聖霊降臨節に入っていくのではなく、聖霊降臨節を過ごしながら、イエス様の受難・復活、そして聖霊のこの世への働きについて学んでいくことにもなりますので、本年は特に、聖霊降臨節を心して過ごすことが求められているといっても過言ではないでしょう。

本日の福音書を見ますと、イエス様が宣教活動を開始するにあたり、12使徒を召されたことが記されています。本日はこの12使徒を中心に学んでいくことにいたしましょう。

ユダヤの国では、先生が使徒を呼び集めるのが常でした。日本の場合は、使徒になりたい人が先生や師匠のところへ行って、使徒にしてもらうことになりますが、ユダヤの国はそれとは反対で、先生から、使徒になりなさいと召し出される形になります。これは単にユダヤの国の習慣を意味するのではなくて、神様からの召し出しに私たちがどのように応じていくのか、神様から私たちはどのような召し出しを受けているのかを意味していることにもなるのは言うまでもありません。

さて、本日の福音書に記されておりました12使徒の名前は、以下の通りでした。まず、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、フィリポとバルトロマイ、トマスと徴税人のマタイ、アルファイの子ヤコブとタダイ、熱心党のシモン、それにイエスを裏切ったイスカリオテのユダの12人です。この中には福音書の中に数多くお活躍や出来事への関りを持った使徒もいれば、名前以外のことはほとんど語られていない使徒もいます。

最初に出てくるペトロ、使徒たちの中で最年長者であり、皆のまとめ役となった最も有名な使徒であるのは皆様もよくご存知の通りです。そしてペトロの弟のアンデレ、彼ら二人はガリラヤ湖の漁師でした。彼らがイエス様に出

会ったのは、その日の漁を終えて網の手入れをしている時でした。その日は彼らの英知をもってしても何の獲物も得られませんでしたので、彼らは残念な気持ちを抱きつつ、次の漁への備えのため網の手入れをしていたのです。そこへイエス様が現れ、これから漁をするようにと言われました。イエス様はもともと大工です。ガリラヤ湖で漁を続け、彼らのすべての経験や知識をもってしてもその日は獲物が得られなかったのに、しかも漁に適した夜明け前はとうに過ぎていくにもかかわらず、大工のイエス様がこれから漁をするようにと言ったのです。他の人だったら何を言うかと相手にせず、応じなかったかもしれません。しかし彼らはお言葉ですからと漁をすると、おびただしい魚が獲れ、船が沈みそうになりました。ゼベダイの子ヤコブとその弟のヨハネも、ペトロ・アンデレと同じ漁師仲間、この時に立ち合っていた人たちです。彼ら四人はこうして「人間を撮る漁師」としてイエス様の最初の使徒になったのでした。

イエス様は「神の国」を宣教するためにこの世界に来られ、そのために使徒を招かれましたので、使徒にふさわしいのは旧約聖書や律法に精通した人たちではないかと思えますけれども、最初に弟子となったのは、当時おそらく時の読み書きはできない、ガリラヤ湖の漁師だったのです。しかしこのうちのペトロ、ゼベダイの子ヤコブとヨハネ兄弟の3人は、イエス様に最も重んじられ活躍をすることになりました。イエス様が使徒に求められたのは、知識ではなく、イエス様に従順に従う心だったのです。

フィリポはベトサイダ出身で、5つのパンと2匹の魚で5千人が満腹した奇跡物語等に登場する使徒です。バルトロマイは名前以外のことが聖書に書かれておりませんが、ヨハネによる福音書を見ますと、フィリポの親友でナタナエルという人が登場し、ナタナエルがイエス様の十二弟子に加えられていることから、バルトロマイとナタナエルは同一人物ではないかと言われています。ナタナエルは日々律法を学び、祈りを欠かさない人でした。

トマスはイエス様の復活物語で、復活のイエス様が弟子たちに姿を現した時にその場におらず、その事実を聞いても、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と信じようとしなかった人として知られています。彼は12使徒の中で最も情熱家であり、使徒の中では最も遠く、インドにまでイエス様のことを宣教に行ったと伝えられています。

徴税人のマタイは、新約聖書冒頭のマタイによる福音書を記すことになったと伝統的に考えられている人です。徴税人は、ユダヤを属州支配していたローマに税金を納めるために任じられている人たちで、ユダヤ人でありながらローマの手先になっていると、ユダヤ人から大変嫌われ、差別を受けていました。その徴税人だったマタイが使徒になったのは、当日の人達にとって私たちが考える以上に驚きで信じられないことであり、周囲からの反発も大きかったのではないのでしょうか。

アルファイの子ヤコブとタダイは、名前以外のことが聖書にはほとんど語られていません。熱心党のシモンは、ガリラヤ地方で、ローマ帝国に対してユダヤ人の解放を求めて過激な実力行使を行っていたグループです。その行動があまりにもゲリラ的だったので熱心党という名前がつけられています。従って熱心党のシモンが一番目の敵にしたのは徴税人だったはずで、その徴税人のマタイが共に使徒としてイエス様に召されていたというのは大変なことだったと言えましょう。イエス様の宣教のため、マタイも熱心党のシモンも、それまでに思いを離れてイエス様の宣教の業を全うしていったのです。

最後に私たちが驚かされるのは、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダが使徒になっています。イエス様はユダの裏切りを最初からご存知でおられたことでしょう。すべての人を罪から救うため、神の国の確固たる約束のため、イエス様はあえてユダを使徒となさったのでした。

イエス様の宣教活動は、およそ3年間であったと考えられていますので、使徒たちもイエス様と3年間生活を共にしつつ、宣教活動に取り組んでいきました。イエス様は弟子たちを各地へ派遣されました。今日の福音書はその冒頭に、イエス様が使徒たちへの留意事項を述べておられる場面です。そしてこの場面は、2千年前に12弟子だけに語られただけではなく、今日、イエス様を伝える使命を与えられている私たちへの言葉でもあります。イエス様のことを人々に伝えなさい、自分自身の生き方をもってイエス様を信じる姿を示しなさい、一人でも多くの方がイエス様につながるよう願い求めつつ、祈りなさい、今日の福音書の個所はそのことを私たちに語っています。

不思議なメンバーでありつつもイエス様の宣教活動を支え続けた使徒たちの姿、それは今日の教会へ与えられている宣教の使命でもあるのです。